

本願の教学（続）

——入出二門の源泉——

安田理深

法然上人では、念仏はあるけれども、念仏の外に仏さまというものがある。浄土もある。念仏で浄土に生まれる。仏さまの念仏によって仏の国に生まれる。こういう訳やね。そうすると、念仏が知らない間に手段になる。念仏を手段として、我々は救われる。こういうような具合になって、どうも念仏が手段になる。手段になったものはつまらんものなんだ、手段というんだから。そうなると念仏がやっぱり聖道門の手段になってしまう。また聖道門にひっくり返ってしまう危険を孕む。そういうのが教学が完成していないという意味だ。親鸞教学ということになると、念仏が仏さまなんだ。親鸞聖人の教学では、南無阿弥陀仏という仏さまなんだ。南無のない阿弥陀仏じゃない。法然上人の方では、南無はこっちにあるし、阿弥陀仏は向こうにあるというような形だ。そうじゃない。阿弥陀仏が南無になっただ。だから南無というところに阿弥陀仏に触れる、こういうのが親鸞だ。だから法然上人は念仏の外に仏さまがあるものだから、やっぱり死んでから仏さまに行くという訳です。生きておられる間に、どれだけあつかましくても、私が仏だと言えない。それを言うのは禪宗の話ですわ。私が仏だとか、この世、穢土が即浄土、娑婆即寂光浄土というのは聖道門の話です。それは言ってもいいけれども、本来言うのは勝手にどれだけでも言う権利がある、口があるから。そうだけれども、そう成るか成らないかが大事やね。成るか成らないかが大事、安心や。娑婆即寂光浄土と言

って、娑婆即寂光浄土になっていけばいいけれどね。そこにはやっぱり教学。娑婆即寂光浄土と言ったことによって、娑婆即寂光浄土に成ったような気持を隠すのじゃないかな。それなら秘密です。公明正大じゃない。看板と内容が偽りがある。だからしてね、いつでも悟ったようなことを言っているけれども、中はそこらの人と同じ事だ。煮ても焼いても食えない凡夫です。顔だけはなにか颯爽として言っているだけだ。

つまり言ってみれば、私にも煩惱がありますということが言えないのだ。これは苦しい話です。煩惱で苦しんでいるのも苦しいけれど、煩惱がないということと言わねばならないのも苦しいわね。偽善者や。そういう具合になっている。私心がある。教えとその人の腹の中とに亀裂がある、怪しいのだ。こういう弱点がやっぱりあるのですね。だから、何かやっぱり死んでから浄土に生まれる。未来往生だ。そうすると、未来往生なら本願だ。本願が成就していない。成就というのは現在を成就という。本願成就というのは現在なんだ。本願なら未来や、未来教学や。未来教学でもしかたないけれども、未来教学にしておくというとすね、さっき言ったように、うかうかすると聖道門に返ると同時に、また現世利益におそわれる。現世利益に隙を与えるんだ。未来往生というようなことを言っているとすね。そうすると現世利益の宗教が興ってくる。天理教でもなんでも、そうでしょう。未来というような事を言ってみても、人間は現在に生きているのだから、未来くらいのところじゃ満足できないわね。そうすると、未来、死んでからは仏さんに任せるけれど、生きている間は神さまに頼むということになる。人間はこすいからです。そういうわけで、生きている間は南無妙法蓮華経でもなんでもいい、けれども、死んでから先は、南無妙法蓮華経ではいけない。これはやっぱり阿弥陀さんに頼まねばならないという訳で、二股膏藥、三股膏藥にもなるわね。そういうような現世利益というものがすね、日本の今の宗教界は現世利益で宗教心がもう荒廃しているでしょう。現世利益という、似て非なる宗教の為に純粹な宗教がもう影を潜めている。ないのならいいんですよ、現世利益が。むしろある為にすね、偽ものがあるためにかえってね、ないほうがまだいいんだけど、偽ものがあるために本当の宗教が隠れてしま

う。今はこういう状態ですね。今はかりじゃない、親鸞の時もそうだった。それが聖道門に逆らえないんだ。聖道門の教えそのものが、解決できるように思えるけれども、そうじゃない。

三河の豊川を走っていると、あそこに豊川稲荷というのがある。豊川稲荷というのは曹洞宗の禅宗の寺にある守り神様です。禅というのは悟った人の話でしょう、禅宗というのは。それがまだ稲荷さんを祀っているんだ、消えない。まあ隙間ですね。悟りが偽ものだという隙間です。だからして悟りという看板を掛けているけれどもね、悟りでないものが悟りという看板で抑えつけられている。そういうものがでてくる。宗教になにか秘密があるとね、そういうものが入り込んで闇取引が行われるのです。公明正大でないんだ。

それで、やっぱり親鸞の場合は、現在。現在の救いということをね、それはみなさん聞いておられるように現生不退とか現生正定聚という言葉で表現している。現在の救いという意味で、未来の救いじゃない。念仏によって現在の救いがある。こういうことがね、もう念仏というところに本願が現成しているんだ。衆生を救うという、たすけたいという本願がですね、その念仏というところにおいて現成しているんだ。法然上人が念仏を言わないのじゃない。聖道門の人も念仏を称えているんですけども、念仏の教学が悪い。教学が不十分だ。本当の意味での念仏の教学がない。念仏はあるけど、念仏の教学がない。その仕事が大事なものだ。その仕事が親鸞の『教行信証』だ。念仏を作ったんじゃないんだ。念仏というのは昔からある。聖道門の中にも念仏がある。法然上人の門下の人々も念仏を称えているけれども、どうもそこに教学がない。この教学の問題、念仏の問題じゃない、一にかかって教学の問題です。それではじめて現生不退というものをですね、言ってみれば、念仏の中に現在の救いを見出してきたということ、これがつまり教学の仕事です。教学が完成した証拠なんだ、南無というところにもう阿弥陀仏になっているというんだ。南無して向こうの阿弥陀仏に行くというんじゃない。南無というところにもう仏がくる。南無というところに仏がきているんだ。仏が南無の中にあるんだ。南無即阿弥陀仏なんだ。これが現在の救いです。阿弥陀仏という意味がですね、

阿弥陀仏という名前じゃなしに、救って下さる仏さまというのじゃない。救われたのを阿弥陀仏というんだ。かたじけないという、それが仏さまなんだ。救われていないのに、仏さまに救われていないのに仏さまと言っているのは、仏さまという理屈じゃないか。そうでしょう。そういうことですね。

だからして、法然上人でも意味が深いのは、法然上人の教学の中で不回向ということですね。善導大師などでも十分には言っていない。それを法然上人は不回向と言われたことが意味深い。その法然上人の不回向と言われた言葉でね、親鸞は、如来回向ということを覚ったんです。それで本願成就の文ではね、「至心に回向したまえり」、こう読んだ。読み換えたということだ。だから親鸞まで読み換えた人はいないのですね。やっぱり「至心に回向して」と読んでいた。自分で回向しようとした。念仏を称えて、念仏の努力を回向してたすかろうとする、ということになるわね。読み換えた人がいないのだから、如来回向というような教学がなかった。親鸞教学というのは回向の教学です。回向の教学。

回向ということはね、その一番本になるのは本願成就の経文、そこに「至心回向」ということが出てくる。それが本ですわ。それから『浄土論』で言えば、回向門というのがありますね。「回向を首として大悲心を成就する」と言っている。一番本は『大無量寿経』、しかし『大無量寿経』が本だけれど、『大無量寿経』にあっても「至心に回向して」と読んでいる。つまり、至心に回向する必要があるなら本願は成就していない。我々が回向することによって本願が成就するというなら、本願が成就していない。本願成就の文というのが、本願成就の文になっていない。本願成就にしたのが親鸞だ。そこに初めて『大無量寿経』の教学というものが完成した。だからして、あれは「至心に回向して」と読む限りね、『大無量寿経』の教学はない。やっぱり『観経』の教学だ。『大無量寿経』に教学が見出せない。それは本願成就の文が読めないから。こういうような一つの大事な問題がそこにある。

『大無量寿経』の教学をどこに見出すかといって、「如是我聞」から全部だと、そんなわけにはいかない。そんな

雲をつかむような話はね。本願が成就するということが教学。その教学によって浄土宗が浄土真宗になった。浄土宗が浄土真宗になったんだ。あそこに教えを見出してきてね。それまでは何か教えというより、『大無量寿経』の本願成就の経文が見えなかったんだ。教えはやっぱ『観経』。念仏は本願から出たけれど、その念仏の教えは、『観無量寿経』、こういう具合になっている。『観経』というものを超えて、本願を説いてある『大無量寿経』の中に、その教えを見出してくる。どこに見出すかというと、本願が成就したということをお教える教えです。本願が成就するのは回向成就という意味だ。ただの成就じゃない。回向成就ということですね。その回向成就ということが、意味をもっているのが念仏だと、こういう意味だ。だからそこにやっぱ、法然上人は「回向して」と読みつつ、しかも「念仏は不回向だ」と、こう言われた。そこらになにか道理があるんだろうと思いますね。そんなことがあるのじゃないかと思えますね。

ああいう昔の、法然上人や親鸞聖人のことばかりじゃなく、今でもね、やっぱ曾我先生とか金子先生という偉い人がおられますが、そういうふうに書いたものだけじゃ、どうも何かね。たまたまそこへ話を聞きに行つてですね、文章の上にはできないことだね、ハッと分かるということがあるわね。文章にはなっていないのだけれども、そういうもので何か眼が開かれるというものがあるといえないか。やっぱりとえてみたら、よく言われるようにです。『歎異抄』の中で、最も深い感銘はどこに受けたか。これも大事な点で、『歎異抄』をたくさん読んだけれど、どこが一番深いものを『歎異抄』から学びとったかというふうなことになる。百人百様じゃないかね。だからある人から聞くんですね、西田先生つて哲学者でしょう。この人はなにも仏教の専攻じゃなく、哲学の専攻です。やっぱ「親鸞一人がためだ」ということを、どこかで聞いたような覚えがある。どこにあるか知らないけれど。実は昔ちゃんと『歎異抄』読んだんだね。その言葉だけは耳に残ったんだ、えらいものだね。耳の底に留った。覚えようとして覚えたんじゃない、覚わったんだ。意識の底に沈澱しているんだ。後年になってからそれが必要になってきて、

どこかで聞いたにちがいないけれど、どこにあったか忘れた。仏教の専門の学者じゃないから、それでなにか聞かれましたという話を聞いております。別に論文の中にそんなことが出ているわけじゃないんですわ。そういう逸話ですね。逸話というものが、法然や親鸞の間にはあったんだろうと思うね。

逸話というものはね、法然上人から聞いたというても、聞いたんじゃない。法然上人は黙っておられる中でも、それを聞いたということがある。言葉を感じたのだ。そういうことがあるからね。曾我先生が清沢先生に遇うてね、いちいち言葉で聞いたかというのと、そうじゃない。曾我先生は清沢先生が黙っておられる、黙っておられる沈黙の中で、心の底からもう見破られたと、こういう経験をもたれたんじゃないかね。まあ、そういうことを聞いてみたことはいらないけれど、聞かなくてもいいんだ。曾我先生の熱意、清沢先生がそういうことを教えたわけじゃないけれど、曾我先生のほうが、深く熟してきて清沢先生の沈黙の中に、大きな言葉を聞いた。そういうことが昔からあるもんだ。

たとえて言えば、「欲生というのは如来、諸有の群生を招喚したもう勅命だ」と。そんなことはどこにも書いてない。そういう勅命を善導大師は本願のなかに聞いたんだ。本願はそういうことを言っていないけれど、言わないのに聞いた。そういうようなことがあるんです。経文というのはなかなか読みにくいというのはそういうもんだ。文字だけで読めるものじゃないのです。ああいう言葉があって、それはどういふことかというのと「弥陀の五劫思惟の本願を、よくよく案じみれば、ひとえに親鸞一人がためである」、こういう言葉が忘れられないというね。あの一語で『歎異抄』の原理をつかんだんだ。あんな立派な言葉があるんだけど、それなら『教行信証』に書いてあるかというのと、書いてありはしない。あれだけの深い感動を与える言葉がね、『教行信証』の文章の中に書いてないんです。そういうことが不思議なことだ。かえって親鸞の言わないことを、親鸞の話を聞いた人がちゃんと書く。こういう不思議なことがある。だからして「回向して」と書いてあるんだけど、ここにも「不回向」ということを言っておられるのではない。そこら何かもやもやしたものがある。もやもやしたものがあるというのが、やっぱりまだ完成していない。

けれども、全然ないのではない。なにか深い暗示がそこに出ている。

不回向は無回向じゃない。回向がないのじゃない。不回向や。「不」というのは回向が不要だという意味だね。回向が無用だというのだ。回向がないんじゃない。回向がないのではなく、我々が回向するんじゃない。だからそうかと言って回向が要らないのじゃない。回向がないのじゃないですね。しかも我々が回向するのじゃない。我々の回向を必要としない。こんなことは、ずっと法然上人の言葉というものを、憶念しておられたんじゃないかと思うんですね。そういうことが縁となつてね、なにかの拍子に親鸞が、「至心回向」という言葉の中に「至心に回向したまえり」という声を読んだんだ。声なき声や。そういうのをまげて読んだのじゃない、声を聞いたのでしよう。「至心に回向」という言葉に「至心に回向したまえり」、という声を親鸞が聞いたんだ。大きな自覚ですね。南無阿弥陀仏の回向だ。一切が南無阿弥陀仏。頼むのもたすけられるのも全部が南無阿弥陀仏。もう一つもっと徹底して言えば、地獄に墮ちるのも南無阿弥陀仏の回向や。浄土に生まれるだけじゃない、地獄に墮ちるのも南無阿弥陀仏。生死に流転するのも南無阿弥陀仏の回向だ。流転しても差し支えない。あえて未来の浄土に生まれる必要はない。こういうような確信がですね、南無阿弥陀仏の中に聞こえてきた。これまで南無阿弥陀仏を聞いていたけど、南無阿弥陀仏がそんな大きな意味をもっているとは思われないわね。ただ声を出して称えるというのは、いろいろな努力の中の一つだと思っていた。そうじゃない。南無阿弥陀仏という念仏は努力無用の世界だ。一切の人間の努力というものがそこで消えてしまう。これまで我々から仏を見ておった。そうじゃなく、仏の中に自分が見出されてきたのです。浮かんできたのです。よく考えて見ればですね、迷う必要のない仏の中に、迷っていったんだ。迷うと仏を外に求める。内の仏があるのに気がつかないで南無阿弥陀仏以外に、南無のほかには、外に仏を求める。救いをね。助けてもらおうと、外に求める。本願がわからないとか、自分の智慧が足りないとか、煩惱が多いとか、もうありとあらゆることか、これまで悩みだつたんだ。それが差し支えない、恐れない。そういう大きな確信ですね。人に恐れないのじゃない、自分に恐れない。

自分のもう人様にさせないような根性に、自分が恐れない。そうすると、人の前にどれだけでも出せる。つまり、これまで秘密に隠していたものがね、自分を公明正大に見られる。罪悪深重の凡夫と、公明正大に自分が見られる。このようにはなかなか見れない。言えることだったら懺悔するけれど、言えないところは懺悔できない。恥ずかしくて言えない。長い間仏法というものを聞いてきた、今頃出てきた人ならいいけど、長い間聞いて仏教の手本だと思っていて、さっぱり自分はわかっていない。そんな秘密は言えない、恥ずかしくて。そういうようなことがもう、堂々と言える。それは人間から出てこない。南無阿弥陀仏に立った。南無阿弥陀仏に立つからそういうことが言える。南無阿弥陀仏を外れるなら、何を言ってもだめなんだ。南無阿弥陀仏の中なら何を言ってもいい。地獄に墮ちても後悔しないというものが出てくる。地獄に墮ちることを恐れる必要はない。南無阿弥陀仏なら地獄も歓迎や。こういうようなものがそこに出る。それは教養が完成したんだ。それを現生不退というんだ。

我々が仏を求めるのじゃなく、仏の願の中にすでに我々が見つかった。いま見つかった時に、見つかったのじゃない。もう初めからですね、本願が起きた時から自分はその中にいた。こういうわけだ。それが、いま自分が気がついた。いま気がついたという時は、それは信の一念です。信心の一念です。信心の一念を獲た時にですね、本願の一念に帰ったんです。本願の方がですね、信の一念を本願の一念に帰し、引き上げてくれた。それが「たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」、本願がおぼしめたのです。本願の一念です。そこに親鸞は自分の一念、念仏もうさんとおもいたつ心を生み出したんです。自分がおもいたつということが、実はそれは本願がおもいたつた、仏がおもいたつた、そこへ帰っていくことです。それで「親鸞一人がため」ということが出てくるんです。だから南無阿弥陀仏がない時はなんにもないんです。そういうことをですね、ここに表わしたんです。

ここではわからないけど、「我依修多羅 真実功德に依って」というのがですね、『浄土論』では如来のことなんです。如来であり、また如来の真実功德であり、又、浄土の真実功德である。「真実功德に依って」という「依って」

というのは「おいて」という意味だ。ところが親鸞は、それをですね、真実功德というのは名号を真実功德と、南無阿弥陀仏を真実功德という。南無阿弥陀仏において一心の眼を開くことだね。そうすると南無阿弥陀仏は法でしょう。仏の言葉や。その仏の言葉に一心の眼を開くというと、その仏の名号全体が信心になるんです。それを「帰命尽十方無碍光如来」と言ったんですね。それは信心でしょう。念仏がそのまま信心になる。一心を開く。つまり如来の本願が一心の眼を開くということ、一心の眼を開いた衆生に入り満つる。充滿するんです。充滿したのが現生不退です。

だから「正信偈」でもね、「帰命無量寿如来 南無不可思議光」と言う。あれはこの「帰命尽十方無碍光如来」と同じことです。「正信偈」もですね。あれが正信なんです。念仏、南無阿弥陀仏でしょう、まず南無阿弥陀仏をかかげた。それに正信を加えるのじゃない。それに正信をかける、主になる。その一心の眼を開いたとたんに、南無阿弥陀仏の主になる。つまり南無阿弥陀仏全体が自分の内容になる。仏が私の内容になる。つまり仏の力になる、本当の意味の自力になる。自分の力、自信になる。南無阿弥陀仏という真理になる。仏の言葉がね。それが一心を開いた人間の確信になるんだ。何ものをも恐れない、何ものも求めないという確信になる。つまりそういうのはね、自律、英語では *autonomy*、自律です。信仰が信仰自身によって信仰を完成した。本願というものが信仰の外にあって、本願に頼っていたという話でない。如来というものが信心の向うにあった、そうじゃない。それはむしろ、かえって信心の、信ずる如来に信心がたすかる、信じない如来じゃない、信ずる如来に信心がたすかる。そうすると信心が信心にたすかっていくことになる。信ずるだけで満足するという意味だ。本願を信ずることだけで満足する。つまり救ってもらうというような欲がなくなるんだ。いらないんだ。救ってもらわなくても差し支えない。それでしよう、さっき言った「地獄に堕ちても後悔しない」というのは。それは深い仏の本願に立った感動だ。この世の中は幸福に、未来死んでからもたすけてもらいたい、というような要求は撤回する。そういうたすけておくれという、そ

ういうような要求は厚顔無恥だ。たすけを要求する、そういう資格はないじゃないか。つまり空で充分だ。それはやけくそじゃない。それが信心だ。こういうのが一心ということだ。

その一心というところに如来の四十八願、本願全体がそこに成就している。だから一心のほかに、いま一心を起こしてこれから仏になるというのじゃない。一心がもう仏なんだ。仏を確信しているんです。一心というものがありさえすれば、仏に成るのは成れる時になったらいんです。一心というところに本願が成就し、その一心というものが成り立つのは、一心の根拠に名号があるからだ。名号を離れたら一心をたてる場所がない。そうすると、自分の考えの上に一心をたてねばならん。念仏がなければ、自分の考えの上に、信仰をたてねばならん。考えた信仰は、人間を救わないんです。人間がたすけてやらねばならん。だから景氣のいい時は、なんか信仰、信仰というけど、一朝とたんにして、家が破産するといった場合に、もうはや腰を抜かしてしまう。大事な場合に働かない。腰を抜かして一番大事な時に、信仰が働いてこない。考えというふうなもので、信仰は成り立つものじゃない。南無阿弥陀仏は考えを必要としないんだ。無理に考えを抑えるのでない。考えてもだめだが、無理に考えを否定するのでもない。この悪い奴がと言ってますね、考えを否定するのも念仏がないからなんです。念仏が見つからないから念仏に目覚めないから考えに頼るし、又、考えがだめなものだと教えられてくるというと、今度は考えを嫌う。えらい熱を入れて自己否定というふうなことをやる。反省するというふうなことを言っただ。それは念仏がないからだ。人間の反省なんて、言ってみたところで、たかが知れたものだ。南無阿弥陀仏というものがあるともう反省するともう余裕も与えないんだ。憎むということがない。きゅうきゅう人間をいじめるということがない。うなるのは、念仏がないからだ。念仏は痛めるということじゃない、念仏は痛むんです。人間をいじめるということはない。痛みは、仏の心です。いじめるのは人間の根性です。

こういうようなことがあって、やっぱり、名号というものが根底にないとね。名号の教学やね。名号によって一心

をたてる。開く。一心は自覚です。名号は法ですね。法があるんです。法がなければ自覚してみようがない。法において、その法に眼を開くのが自覚。だから法において眼を開けば、眼を開いた時にね……。自覚には時が要るんです。念仏はいつでもある。しかし念仏に眼を開くのは時がある。念仏に眼を開いた時に、念仏全体の回向にあずかる。それまでは、念仏の中にあってもですね、勝手に外を見ているのだからして、念仏の中に埋もれていても、念仏の中で不平不満をいだいている。不平不満のままです。かるといいうことはない。だからして、南無阿弥陀仏の中にあっても南無阿弥陀仏に目を覚ました時に、南無阿弥陀仏全体が我ものになる。再認識だ。初にお目にかかるんじゃない、再認識ですね。

（本稿は、岐阜慈光会主催の『入出二門偈』の会における昭和五十年八月八日午前の講話の後半を整理したものである。文責編集部）